

ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(2)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月24日に行われたロンドン公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

Bachtrack

25 February 2020

Mark Pullinger

パーヴォ・ヤルヴィとNHK交響楽団による情熱的で熱狂的なラフマニノフ

セルゲイ・ラフマニノフは1918年にロシアから自主的に亡命して以降、自身の《交響曲第2番》を決して指揮することはなかった。痛々しいほどに故郷を思い起こさせる、その本質にロシア的な部分がある曲だったからだろう。《交響曲 第2番》という曲は、ともすれば1時間に渡るノスタルジックな自己憐憫になりかねず、とりとめがなさすぎるという批判を浴びることもある。事実この曲は、1970年代まではふつう45分(ときには35分)までに縮めて演奏されていた。しかし、パーヴォ・ヤルヴィと東京のNHK交響楽団によるヨーロッパ・ツアーのロンドン公演でのこの楽曲の演奏には、冗長な箇所はまったくなく、推進力と切迫感をもって音楽が突き進んでいた。

これは、ストラヴィンスキーが「6フィート半のしかめっ面」と評したラフマニノフではなかった。ヤルヴィは情熱的で熱狂的な解釈を見せた。NHK交響楽団の弦楽器は驚くべきほど暗い、マホガニーの音色で、豊かに響くチェロとコントラバス、そして優しげなヴァイオリンが交互に歌うように掛け合うとともに、非常に注意深くフレーズを優しく響かせた。ヤルヴィの指揮は派手ではなく、彼自身に注目を集めさせることは決してない。冒頭のラルゴは感動的で、熱烈で、切望に溢れた演奏だったが、哀愁に満ちていた。アレグロ・モデラートへの移行は自然で、気を引くようなルバートが優しげな押し引きによって聴き手をかきたてた。疾走し続けるスケルツォでは、ヴィオラはエンジンの役割を務め、楽章のすべてに緊張感と精緻なリズムをもたらしていた。オーボエとクラリネットはベルアップで演奏していた。一方ヤルヴィはポルタメントを巧みに操り、弦楽器が夢見るようにため息をつく時間をもたらした。首席クラリネットの松本健司が素晴らしいメロディーを形作っていたが、蕩けるようなアダージョは常に力動感を持ち合わせていた。ヤルヴィは最終楽章でまっしぐらに突き進み、管楽器の入りは多少不完全だったものの、ラフマニノフの迫力のある結末まで自信を持って堂々とした

演奏を聴かせてくれた。私が演奏会で聴いた《交響曲 第2番》のなかで、最も良い演奏の一つだった。

演奏会は東京からのポストカードで始まった。エミリー・ディキンソンの詩による標題を持つ武満徹の《ハウ・スロー・ザ・ウィンド》は繊細な音詩である。NHK交響楽団、とりわけささやくようなハープとパーカッション、そよ風のようなアルト・フルートによる愛情のこもった演奏だった。ドビュッシーの《牧神の午後への前奏曲》の陽炎が聴きとれただろうか。一枚布を通して聴こえるかのように、楽曲には確かにとらえどころのない性質があった。NHK交響楽団が武満作品を素晴らしく演奏してくれたことはとても良かった。というのも、ヨーロッパの演奏会であまり聴くことのできる作曲家ではないからである。

シューマンの《チェロ協奏曲 イ短調》も、強力な演奏家を必要とする。シューマンの生前に演奏されなかった楽曲で、ものにするのが難しい、掴みどころのない性格をもつ。新しい楽想にチェロがとどまるのを待つことなく、叙情的な楽想が次々と過ぎ去っていく。愛情を持って演奏したソル・ガベッタ以上に、この協奏曲にとって素晴らしい演奏家がいるだろうか。彼女のマッテオ・ゴフリラーの音色は優美で、決して不自然にならず、ガベッタによる非常に優しいカンタービレの旋律を実現させていた。彼女は指揮者とオーケストラ両方との素晴らしいふれあいにひたり、しばしば演奏しないときは肩で「指揮」をしたり、特にロンドの最終楽章で、他の弦楽器奏者に冗談めかすように拍車をかけたりしていた。彼女がアンコールとして演奏したペトリス・ヴァスクスの《チェロのための本》からの独奏曲も素晴らしかった。グリッサンドや超高音の演奏技法とならび、ソリストに歌唱を要求している楽曲だが、ガベッタはそれをみごとにやってのけた。